

# 1 新しい学問形成過程への試論：人間関係の原論

— 日本の大学カリキュラムにおける生命論パラダイム・シフト —

まどか 蛭 田 庸 代 (南山短期大学助教授)

## 1 ホロンとしての人間観 学問観

<人間><学問>に関する change agent としての Learning Community  
人間関係原論 及び 人間関係科原論という時空間場づくりとしての共育

人間関係とは何か。これが人間関係原論の研究テーマであり、又このテーマを問いかけあっていくプロセスや方法論そのものが「人間関係」(学)研究のあり方として科の生命的歴史遺産として残りうるものである。

大学機関における人間探究は、西洋キリスト教的世界観のもと、人を、肉体と精神、ものところ、身体と霊に区別し形而下学(物理)と形而上学(神学)に方法が分担され近代科学や近代知の発展がもたらされた。その近代西洋の「学」の歴史が、日本開国後の大学教育研究の柱となって近代化政策・科学的教育研究の一端として移入された。又、1945年敗戦後の日本の新たな目標は米国経由のデモクラシー民主主義や個人主義individualismによる問題解決法であった。

個と全体(one & whole)の生き方 私と公 わたしとあなた 個人と組織 原子論と個人主義(atomism & individualism)の捉え方については前述した(「現代科学における個と全体の問題 特集[グループの中に生きる]人間関係研究センター紀要5号 1987)。

自然科学的方法、原子分子という要素還元論による分析中心の説明や、現象を機械論的にモノレベルで説明するという、科学的記述/科学中心の学問が、知的学問の中心に据えられ、論理性科学性が重視された。

近代的モダニズムは 学問研究教育世界においては、[科学的厳密性、一般性、論理性] を現代人にもたらした。

その時代の学問研究法を通して人間をどうみるか（人間観）は、自然の見方やものの視点・パラダイム（考え方の枠組み）研究、即ちその時代の自然科学や物理学のフィロソフィーからも大きく作用する。

[人間は社会の一分子である。]とは、全体の一要素としての人間観である。公の中の私、滅私奉公の社会観、組織会社管理社会など封建制度の近代国家のもとで有効な要素還元論の人間観である。

[人間はホロンである。]とは、個も生き全体も生きる関わり存在としての相補性のあるホロニックな人間観である。

人間や関わりを研究する学問は方法論上変革し得るホロン関係である。人間関係原論という研究の試みは、学問体制への再構築 re-struction, 変革 re-volution /創造/ゆとり re-creation を結果的にもたらず。

ここでは、ホロンの学問形成、ホロンの人間教育や教育システムとはどのようなものなのか、平成元年(1989)より 教員スタッフチームと学生全体による人間関係科という研究学習共同体として取り組んでいる [人間関係の原論] を一例として紹介する。

## 2 「人間関係」学習研究フィロソフィー開拓の為のカリキュラム変革(1989)

フィロソフィーや学問には、通念化された理に従って生きる哲学者がおり、哲学の課題に挑戦してその哲学の枠組みの洗い直しや創造に生きる哲学者がいる。(加藤周一「日本人について」)\*

学としての人間関係(科)のフィロソフィーは、後者の研究法を実践的に模索する営みである。

その意味ではカトリック精神のいう 常に人間の普遍性探究のための創造変革実践が、この人間関係科コミュニティでの生活の中で、学科構成員であるスタッフ教員・学生共々各自の生き方に、問われ続けているのである。

人間関係「について」学ぶのではなく人間関係「を」生き学ぶ …これが、本学人間関係科創設(1973)の大学高等教育研究機関としての新しさであった。時代的には、1960年代後半からの学生運動余波の中、人間性復興を目指す大学改革期であった。「・・・について」学ぶというトップダウン知識教育教授教育法だけではなく、「・・・を生き」学ぶという本人の主體的関わりの行動実践を組みした「Laboratory-method 体験学習法」\*を大学カリキュラムに取り入れた人間関係学科の試みは、日本において本学科が初めてであり、創設当

初より、現代の（大学高等）教育のあり方や人間・関係をテーマとする一連の研究アプローチ法のあり方への新しい実践的問い直しそのものでもあった。

1960-1970年代米国のニューエイジ運動は、人間性教育の場にも新たなパラダイムシフトの波とみなされる。

人間関係を学ぶ・研究する*étude*・知るとは ということなのか、という「学としての人間関係」の捉え方が、その科独自のカリキュラムの組み方に反映される。現代日本の大学・生涯学習における「神学」ならぬ「人間学」、神性を内在した人間性探究法を、カトリックの信仰と神学の歴史を踏まえた南山での高等教育機関が、「人間関係科」（「学科」でなく「科」）として学問教育の新しい枠組みつくり・チャレンジをする実践的 learning community たらんとしているのである。

人間関係科はその構成員（メンバー）一人一人またはそのグループの織りなす「人間関係」そのままを学習の素材として生き学ぶ場である。（日常性の非日常化）

また同時に、人間関係という学としての研究教育方法の確保・変革を社会に還元するという時代的チャレンジの場でもある。（非日常の日常化）

1973年開設当時（25年前）の人間関係に関するカリキュラム編成の学問領域の柱は哲学／心理学／社会学／教育学であった。（人間関係センター紀要vol.2-3、1985） 従って、人間関係の学問的フィロソフィーを扱う [人間関係基礎論] をその研究アプローチ法によって伝統的通常学問領域のうち三領域に重心をおき、カリキュラムでは、基礎論Ⅰ（哲学的基礎論）、Ⅱ（心理学的基礎論）、Ⅲ（社会学的基礎論）と構成していた。

その後試行・検討の歴史を重ねる中で、教員スタッフの毎年学年末3日間集中会議（通称名、教員合宿）や1980年代後半数年間にわたるカリキュラム科会での討議により、1990年カリキュラム変革が実施された。

人間関係基礎論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲという伝統的学問領域別基礎論は、「人間関係原論Ⅰ（1年生全員で一クラス通年）及びⅡ（2年生全員）」と一本化し、更に、「人間関係プロセス論A（グループプロセス）及びB（コミュニケーションプロセス）」も生み出された。

ここで報告する授業 [人間関係原論] は、1988年のカリキュラム変革のミーティングを数年に渡り重ねる中で、基礎論ⅠⅡⅢの融合として発案され、人間関係科の学際的創造的実践的共同体プログラムとして実施開始となった。学際領域としての [人間関係] を単に従来の通常学問領域の方法論にとどめず、[人間関係科] という学習研究生活コミュニティ（共同体）による実践的学際的フィロソフィーの創造を試みるものである。

これは、創造的学問領域形成の一端を担うものとなろう。日本という西欧型

近代国家体制の、即ち、教育・研究・学問界における「機械論パラダイムから生命論パラダイム」への、learning communityとしての実践的シフト例といえるであろう。

「人間関係」学習研究の原点・原論・基礎論探求は、通常科学の領域及びその複合に頼るだけでなく、むしろ創造的な人間関係の学際的（学のコミュニケーションや生成・成立も伴う）領域づくりのチャレンジへと向かった。これは、人間関係科を構成する教職員学生全体による「人間関係学習研究共同体」による人間関係原論作り2年間の探索ということである。そのプロセスとその研究成果（コンテンツ）が2年間の授業及び人関ライフを通して教職員学生全員に問われるという「クラス＝暮らす」なのである。従って、1990年代人間関係科「人間関係原論」は、複数領域出身のスタッフ4名チームと一学年106名学生で二年間繰り広げられる人間関係科学習研究共同体LEARNING COMMUNITYプロジェクトなのである。体験とその言語化、「人間関係」の仮説の指向体験学習の循環過程が、そのクラスの2年間で展開されたのである。

人間関係がそもそも科学的論理的学問研究対象となりうるのか、という問いかけは、human science, social science, natural science を柱とする大学学部学科成立のテーマであった。人間のアカデミズムを、西洋の学問では神学、法学と科学に分担した。

1970年代南山短大新学科構想の名称として、[人間関係科]の他に、神学科というアイデアもあったときく。人と神、人ともものという世界観は、人間智のテーマだからである。[かかわり][関係論]という視点は、学問領域に新しい視点をもたらしているからこそ、人間英知の、または、学問研究法の新しい開拓を現代人として求められているのである。この意味で、[人間関係原論]を大学レベルでの一講座として、位置づけつつ、人間関係科構成メンバーによる現代智へのチャレンジとして取り組まれている主要カリキュラムである。

### 3 人間関係論から生命論へ：人間中心主義・行動科学中心の体験学習法の行方 機械論から生命論的パラダイムシフトの視点転換

「生命論パラダイムの時代」(ダイヤモンド社1993)より

- 1) 「機械世界観」から「生命的世界観」へ
- 2) 「静的な構造」から「動的なプロセス」へ
- 3) 「設計・制御」から「自己組織化」へ
- 4) 「連続的な進歩」から「不連続な進化」へ
- 5) 「要素還元主義」から「全包括主義」へ
- 6) 「フォーカスの視点」から「エコロジカルな視点」へ
- 7) 「他者としての世界」から「自己を含む世界」へ

- 8) 「制約条件としての世界」から「自己を含む世界」へ
- 9) 「性能・効率による評価」から「意味・価値による評価」へ
- 10) 「言語による知の伝達」から「非言語による知の伝達」へ

体験学習による生命論がもたらす発想転換（まどか1990[内在性重視型発想の学問観・人間性開発][気づき重視トレーニングの科学的根拠を探る]）より

1) 生命科学的な世界：

「atomism 原子論」から「Bio-holonism 生きた全体論」へ

2) 社会構造、政治・経済世界：

「individualism 西洋個人主義」から「system論・関係論」へ

3) 神学、宗教、精神世界：

「超越性・階層制」から「内在性・共生」へ

4) 家庭学校会社組織、教育界：

「教えられる姿勢」から「学び合う姿勢」へ

「パターナリズム」から「対等友人関係」へ

「受身・他律」から「自立・自律」

「従属・従順」から「気づき・自己尊重」へ

5) 情報世界：

「ヒエラルキー型主従関係」から「ネットワーク型共生もしくは下克上」へ

<参考図書>

- 1972 A.トフラー「未来の衝撃」
- 1972 ローマクラブ「成長の限界」地球資源  
「不確実性の時代」低成長時代
- 1985 アーサー・ケストラー「ホロン革命」ホロン
- 1974 トマス・クーン「科学革命」パラダイム
- 1977 イリヤ・プリゴジン 自己組織化
- 1992 ミシェル・ワールドロップ「複雑系」